

## 大学運動選手の不適応についての事例研究

### －スポーツにおける対象喪失－

菊 地 直 子

Case Study of Maladjustment of Collegiate Athlete – Object Loss in a Sport –

Naoko kikuchi

In this research, the following were suggested by examining the case in detail of maladaptive of the university student athlete.

- ① There is a possibility that the athlete who cannot become a top athlete also has top athlete's problem factor.
- ② The object was not "sport" for him, but "Aim to be a top athlete."
- ③ He was not completed as for the morning-work of the object loss. As a result, His goal setting was the same as the high school.
- ④ Therefore, His approach becomes fixate, nothing comes out of it.

From the results above, Maladjustment of collegiate athlete be essential for understanding .we need to realize that One is the early developmental history, and the other a possibility of experiencing "Object loss" not being possible to become top even if the game is continued.

Key word: Object loss, unfinished business, student athlete, maladjustment

### I . 問題

近年、大学生の大学不適応が深刻化している。青年期後期にあたる大学生活は、社会に出る予期・準備期間とも言え、この時期の取り組みは社会生活への適応のための重要な手がかりとなる。しかし年々、モラトリアムや青年期延長等が指摘されており、最近では大学時代にアイデンティティを獲得し、適応的な社会化を果たすことが出来なくなってきているようにさえ見える。これはまた、それまでの取り組みを活かし、入学後、卒業後の明確な目的をもって入学することが予想された体育大学生においても同様と思われる。例えば、S体育大学における退学者の調査<sup>6)</sup>では、退学者の約75%にも上る数がス

ポーツ推薦入学の学生であることを報告している。このようなアスリートにおける大学不適応は、彼らとその競技レベルを維持するために投資してきたこれまでの競技への取り組み方が大きく関わる事が予想され、一般学生とは一線を画すと考えられる。

本研究者が担当していた学生相談室には、競技不振やクラブ内における人間関係等を主訴とした学生アスリートの来談があるが、多くは、彼らのアイデンティティに関わる課題である印象を受ける。特に大学生活に不適応傾向を示す学生は、これまでの競技への取り組みと現在、ひいては未来の取り組みの展望との間で上手く折り合いがつかないとも言える。したがって、

彼らの大学不適應を検討する際、競技への取り組みの状況や、その取り組みが実を結ばないこととの関連は見逃すことはできない。

記録の向上や勝利することを目的とした競技スポーツにおいては、スポーツの高度化と共に数々の心理力動的な問題が提起されている。これまで、スポーツ経験と人格形成の関係は、体育・スポーツ心理学領域における古典的テーマであり、その多くはスポーツ経験が人格形成に及ぼす影響の確認を目的にしたものであった<sup>19)</sup>。しかし、最近の研究では、引退後の不適應が問題にされ、競技以外の対象がないことや、引退は対象喪失の危機であることが指摘されており、そのような状態に至る背景・経過の研究が行われている<sup>19) 20)</sup>。したがって、アスリートの不適應問題についての議論は、競技経験が人格にどのような影響を及ぼしたかという点についても言及されなくてはならないことを示している。そこで菊地<sup>7)</sup>は、大学生アスリートを取り巻く問題として環境の要因と、彼らが形成する志向性や価値観等の内的な要因とに大別してTable1のように整理し報告した。これらの要因の所在や関連は、あくまでトップアスリートの有する要因として指摘されたものであって、大学生アスリートの不適應問題をそのまま説明できるものではない。しかし彼らの送ってきた高校までの多感な時期における競技生活は、トップアスリートが送ってきた競技生活とほとんど同一であることを考えれば重要な手がかりになり得る。

ところで、競技者にとって競技から離脱することは、決定的な対象喪失である。しかし、本研究者は大学不適應を呈している学生アスリートとお会いするなか、競技を継続していても、競技を失ったと同様の対象喪失が起きていることに気づいた。そこからアスリートにとって、ただ単に競技を失わないことは対象喪失とならないのだろうかとの疑問を持つようになった。彼らがこれまで追求してきた「勝つ」こと、ひいてはトップアスリートになることと、単に競技を続けることは全く違うことなのでは

ないのだろうか、つまり競技を続けていてもこのような対象喪失は実は競技者の中で起きているのではないかと感じるようになってきたのである。アスリートにとって、勝つこと、すなわちトップアスリートを目指すことは、競技スポーツの性格上当然過ぎることであり、しかもそのための心理的・社会的・経済的・身体的投資は尋常なものではない。Table1に示されたアスリートの内的・外的要因はまさにその過程で形成されている。一般にアスリートの競技生命は身体的にも他の領域と比べ短い。さらに日本の大学生アスリートは、米国等の事情とは異なり<sup>3)</sup>、職業としてアスリートであり続けることを選択できる人はごく限られている。したがって、アスリートとしての展望は大学入学以前後にほぼ自覚できることが多く、どのように大学に競技と関わるかについては、これまでの取り組みとその戦績からある程度の見通しを持つことになる。したがって、競技へのこれまでの取り組みを一つのゲシュタルト<sup>27) 28)</sup>として終結させ、新たな目標を設定することが重要となるであろう。しかし、これまで述べてきたようにトップアスリートを目指して自己投入してきた人たちにとって、競技とのかわりを簡単に変えることは困難である。このように、結果としてその望みが果たされない大多数のアスリートたちは、彼らがこれまで取り組んできた競技の目的や取り組みが果たされなかったことについて、うまく折り合いをつけていくという課題がある。この取り組みと大学不適應には、この困難な課題ゆえに深い関連があることは容易に推測できる。しかし従来の研究では、上述してきたような競技生活からの影響や、「トップになる」という達成されなかった要求とその後の大学生活不適應との関連に焦点を当てたものは見当たらない。さらに、トップアスリートはその競技成績からも稀有な存在といえ、同じ状況下でトレーニングしていながらトップにたてない、未完結のゲシュタルトを経験するアスリートは彼らの何倍も存在する。そのことからトップアスリートの持つ問題要因を手がかりと

した検討と、これまで拠り所としてきた取り組みが果たされなかったという未完結のゲシユタルトについて追究することは意義のあることであると思われた。

以上から本研究では、彼らの大学入学以前に形成された内的な要因が、大学生活におけるストレスにネガティブな反応をする要因として働くと推測した。さらに、彼らの「トップアスリートになれなかった」という、果たされなかった要求と現状との適応過程についても検討する。彼らの内面化された要因に焦点を当てるためには、彼らがどのように競技を開始し、アスリートとして現役時代を過ごし、大学入学をどのように体験したのかを明らかにすることが大きな意味を持つと考えられる。そこには、共通する心理社会的な発達課題やプロセスが認められるのではないだろうか。したがって、本研究は一般的心理学研究法である自然科学パラダイムに準ずる仮説生成-検証過程をモデルとしたものではなく、臨床事例を扱う事例研究を採用した。そもそも臨床心理学の目的は、心の病に悩む人をいかに理解・治療するかということであり、原因究明などの因果関係での説明には限界がある。スポーツ場面におけるさまざまな心理臨床的な問題の多くもまた同様であることのほうが多い。このように極めて実際的な要請から生じてきた領域では、一般的な理解はそれほど役に立たない。したがって、当人の主観の

世界を対象とせざるをえないのである。しかし、個別事例の中にも共通する心理が含まれている<sup>26)</sup>ことは周知のことである。ゆえに本研究により、彼らの内面を理解し検討していくことは、大学不適応克服の具体的な援助方略を検討することにつながってくると思われる。

## II. 目的

本研究ではまず、菊地<sup>7)</sup>の提出したスポーツ社会学分野の先行文献によるスポーツの高度化に伴うアスリートのおかれる状況(環境要因)と、トップアスリートの引退を課題とした研究から、アスリートの志向性等の内的要因が本事例対象者において対応するのか、また、その要因がいつ、どのように体験され、内面化されていくか観察し、それらの要因の関連を検討する。

次に、トップアスリートになれなかったという「果たされなかった」体験が、大学入学・現在の取り組みに及ぼす影響について検討する。そして競技を失うこと自体だけではなく、トップアスリートになるという競技者の究極の目標を失うことが対象喪失になりうるのか検討を加える。なお、本研究ではトップアスリートになる要件(能力、動機づけ、競技実績)を満たし、かつトップアスリートを目指しトレーニングする競技者(championship 出場者等)を「アスリート」、そのなかでもトップを維持、増進し続けるアスリート(championship 優勝者等)を「トップアスリート」と定義した。

## III. 方法

### (1) 対象者

対象者と対象者選定の理由

対象者は、大学学生相談室に来談した学生で、主訴は「強くなりたいけれど、どうしたらいいのかわからない。このままではだめな気がする」というものであった。緊張で自分のパフォーマンスを最大限発揮できないとい

Table 1

環境要因	①スポーツから人間疎外、人間の用具化
	②競技を最優先事項としなければならない状況
	③競技生活を支えてくれる便宜の存在
	④ソーシャル・サポートが得られにくい
	⑤目的のために合理化された環境
内的要因	⑥競技者として専念できる環境を志向
	⑦自己価値や自尊心の多くを競技状況に求める
	⑧社会生活を営むための多くの対象を無視・犠牲
	⑨多大なる身体的心理的投資
	⑩競技以外の対象を持たない

う悩みも抱えており、大学の競技生活に関して未来の展望も暗く、「何をやってもだめな人間なのかもしれない」という思いを抱き、このままいけば大学不適應の可能性が濃いことが推察された。対象者の出身校は、その種目では全国でも屈指の名門校であり、全国優勝を含む高い競技成績をあげている。彼は、その名門校よりその1年前から積極的な勧誘を受け、スポーツ特待生として入学した。彼はトップアスリート目指してトレーニングを積んだが、結局その夢は果たせず、漠然とはしていたものの体育の先生になりたいという目標のもと、体育大学に入学した。上記から、対象者はトップアスリートを育成する環境から競技能力を認められて選抜され、トレーニングしており、また大学入試もその競技成績から選抜されている。来室当初に不適應傾向を示していたことから、本研究の事例としてふさわしいと判断した。

## (2) 面接による調査

- ①調査期間：平成X年12月8日～平成X+1年1月10日(3回)
- ②調査内容：面接は、主たるものが1回(70分)とさらに詳細なものを得る目的で補足的にその後二回(各30分)行なった。インタビューは、競技開始期から現在に至るまでを時間的経過に沿って行なった。記録は、予め本人の承諾を得て、会話をテープに収録した。なお、本事例対象者には、論文等に伴う事例の記述について了承を頂いている。

## IV. 事例の提示

### (1) 事例提示の仕方

まず、事例の概略を示し、競技開始期である小学校4年生から、大学2年生である調査当時まで時間的経過に沿って提示した。また、事例中に示される「」は、当事者の逐語を示した。なお、本事例は匿名

性に配慮し、個人が特定できない様、主旨に影響が出ない程度に修正されていることを加えておく。

### (2) 事例概要

大学2年生、(来室当時)20歳、男性、球技系種目選手

競技継続年数:11年

主要競技歴

小学校:全国大会優勝、中学校:全国大会2年連続ベスト8、高等学校:全国大会ベスト16(高校2年生)

### (3) 事例の不適應状態

練習においては、意欲が持続せず「何をやっても三日坊主」。特定のスキル時に震えがある。

大学の授業は、「何でここにいるのかわからなくなる」といい、授業を休みがちであった。

体調は、胃腸の健康が優れず不定期に下痢などの症状。過敏性大腸炎の診断あり。

### (4) 事例

[小学校]

彼が競技を始めたのは小学4年からで、スポーツ少年団に入ったことでそれは日課となった。指導者は全くの素人で、主に兄が練習相手になってくれ、6年生のときに全国大会で優勝することができた。当時は、「楽しく、夢中」で取り組んでおり、勝った事によって「自信が出てきた」という。この頃は、競技を「いくらやっても苦にならなかった」。周囲に期待されるようになり、自分でも「もっと強くなれると思っていた」。中学校の選択は、練習時間が確保されている「県内では2番目に強い学校」を選んだ。

[中学校]

進学当初から「全国大会優勝者という目で見られ」、自信を持って出てきたものの「実際は勝てなかった(ベスト8)」。そのため、「本当だったらできたものできなかった」と考え、自分を「だめな人間

だと思うようになった」。しかし、2年生のとき県大会、ブロック大会を優勝して全国でベスト8進出を果たし、「自信を回復」しはじめた。3年になると、昨年の成績より更に上位入賞をしようと努力したが、ブロック大会で準優勝、全国大会では同じくベスト8という成績に終わる。彼は、全国大会入賞については決して評価することなく、ブロック大会で優勝できなかったことにこだわり、「実際の力は伸びていない感じ」と評している。授業中は、監督以外の先生から授業中に「『寝てていいよ』といわれてた」ほど試合数が多く、練習時間も長いことを「分かってくれているんだ」と単純に考えていた。また、そうした先生は彼にとって「いい先生」であった。

彼の生活は「遊ぶ時間とか勉強の時間とかを犠牲に」して成り立っており、「自分の時間が欲しいと思っていた」が、休みの日も監督から『高校に練習にいきなさい』と指示された。生活時間帯が同じでないために「部活以外の友達(勉強や遊びに)誘ってくれなくなり、部活以外の友達と遊ぶなくなった」。彼は、一種の焦りを感じており、「(部活の)外の感じが分からず、置いてかれるような気がした」と語っているが、それでも「苦ではなかった」という。

高校の選択は、競技の環境(指導者がおり、練習の質も最も確保できる)が整っているところを志望していたが、第一希望は入試制度が変わったため(特待生制度廃止)に経済的都合で、第二希望は学業成績が原因であきらめた。結局は中学2年生の時から勧誘を受けていた高校に決めた。本当は「ますます勉強しなくなる」し、「ばかになってしまう」ので嫌だったが、『おまえのために枠をあけておく』という(高校の)監督の言葉や、中学の先生から『環境もいいし、おまえにプラスに

なる』と勧められて決意した。

[高校]

入学当初から「監督に期待され」、「自分はできる、頑張ろう」と決意し、まずまず競技に打ち込んだ。しかし、監督から『勉強はしなくていい』といわれ、また日々の練習に忙殺されて、勉強はしたくても出来なかった。そのため、ここでも部活の友人しか出来ず、地元(彼は寮生活)の友人から、将来像(受験)や勉強、遊び等についての情報に触れるたび、「焦りを感じた」。彼が特待生として授業料免除で入学したのは、スポーツコースで、入学当時はクラスの全員全てが、様々な競技での中学のトップクラスのアスリートたちだった。勉強の話題は全くなく、「部活を真剣にやってきた人ばかりなので、みんな授業中には寝ていた」。例外として勉強をがんばっていた人は、「クラス中から仲間はずれにされた」。彼らはトップアスリートになるという道を断念して次へのステップのために勉強していたが、クラスではそのことに反感を持ったようである。彼は、「そのクラスで勉強しているということが不思議な感じがした」という。2年のブロック大会で負けた時から、彼は事実上トップアスリートになる道を閉ざされてしまった。この試合は、とても「大事な試合で負けるわけにはいかないもの」であった。途中交代のとき、既に先輩達のミスの連続でポイントが離されており、監督から、『この試合勝てなくてもお前のせいではないから。3年のせいにしていいから頑張れ』といわれていた。しかし、結局は勝つ事が出来ず、後で監督から呼ばれて『お前のせいで負けた。お前は学校の名譽に泥を塗った』、『自分の本当の力を出してない、出せない奴なんだ』等の悪口雑言を浴びせられた。そう言われると彼も「自分のせいで負けた」と認識し、「期待を裏切った」と自分

を責めた。そしてその認知は現在も変わらない。例えば、その試合を口にしようとする時はいつも「自分のせいで負けた試合で……」と申し訳なさそうに口にする。それからは、毎日のように監督から『お前みたいな奴はいても意味がない』と執拗に責めつづけられた。さらに、「自分のほうが明らかに上なのに自分より弱い奴が出て自分ははずされ、試合に出してもらえなかった」。その理由について監督は一切口にせず、全く彼を無視した。そのため、彼は「自分を立て直すことが出来なく」なり、「もうだめだ」と感じた。さらに、後輩に「すごい奴が入部していた」こともあって、彼は「不眠症」に悩まされ「円形脱毛症になってしまった」。彼はこの時の「後遺症」として「思ったことを人に言えなくなった」といっている。3年生になっても、監督から「毎日のように存在そのものを否定」されつづけ、試合には「ただの一度も」出してもらえなかった。彼にとって「監督の言葉は絶対で疑問の持ちようがなかった」。そのため「落込む一方」であり、「見返してやろうなんて思えなかった」。もはや自分がアスリートとしてチームに貢献できないと認知すると、「主務になって貢献できないかな」と考えはじめる。しかし、思い切ることができず、希望を捨てられなかった。「どっかで頑張ればどうかなるのでは…」と考え、わずかなチャンスにも期待した。内心では「先生は自分のこと価値があると考えててくれるのかなあ」と希望を見出そうとする。しかし何かにつけ、『だからおまえはだめなんだ』と責められた。

「辞めたいとも思った」。相談した父親からは『お前が頑張ってくれればそれでいい』といってもらったが、『途中で投げ出すような真似だけはするな』とも釘をさされており、「自分の中学の後輩が入学できなくなったらかわいそうだと思っ

た」こと、「自分という(イジメの)的がいなくなると、自分といっしょに入学した友達が的にされるだろう」という予測から退部を思いとどまった。

3年の後半、新たに進学の問題が彼を悩ませた。漠然と「前からなりたいたと考えていた体育の先生」になるために体育大学を志望するが、〇〇体育大学は、「監督の出身校とは対立している」派閥だったため、断念。国立の△△大学を受験したが、これも失敗した。この時期は「全人生を否定され」、「途方にくれた」。「自分は何ができるのだろう」、「これからどうなるんだろう」。「何がやりたいのかときかれたら何もありませんって言う感じ」。「何で勉強とかしてこなかったんだろう」。「この時初めてこの学校に入ってよかったのかと疑問をもった」。彼はこの時期については「最も強烈な印象」を持っており、「思い出したくない時代」といっている。最終的には、現在の体育大学を高校2年までの戦績と、実技試験によって合格することができた。高校の監督は、「△△大学失敗を聞いて、現在在学の大学にその場で連絡をとってくれた」のだが、それは「その高校に受験する際の契約に、“間違いなく進路を確保する”というものがあったから」であるという。しかし、彼にとっては「泣きたいぐらいうれしかった」。

#### [大学]

彼は大学で、「高校でできなかった分を取り戻したい」と強く願い、再び努力しはじめる。クラブの中にも「趣味が合わない」、「パチンコとかゲームとか面白いと思わない」等、特定の友人を持たず、「勝たなくちゃ。勝たなくちゃ」といつも考えていた。「生活のほとんどは競技のことを考えて」いた。

彼の出身校が全国屈指の名門であったため、「周囲から期待を感じた」彼だったが、

「自分はもうだめなんじゃないか」という怖れもあった。一年生の時はプレッシャーにつぶされ、「やっぱりだめ」で、「自分は本当にだめだと思え」、「人の評価は本当だ」と思えた。「他の大学の人からよい評価をもらっても信じられず、失敗して『やはりだめ』といわれると、そちらの評価を信じてしまう」ようになった。そんな自分が嫌で、「何とかしたかった」が、「感覚が麻痺したみたいに、どうしていいかわからなかった」。「今度からこうしよう」と決意してもなかなか継続することが出来ず、その度に「だめな人間だ」と思っている。目標は、今までと同じで「できればやはりトップになりたい」、「実業団にいきたい」ということであった

## V. 討議

### (1) 先行研究から抽出した要因との対応

事例の記述より、先行研究から抽出したトップアスリートの不適応問題に関連する①～⑩の要因との対応を Table2 に示した。その結果、各要因はほとんど対応していることが明らかとなった。したがって、対象者はトップアスリートではなかったが、トップアスリートが経験する環境因子と内的因子が認められ、同様の内的状況を形成していると考えられた。先に触れたように①～⑤は、主にアスリートを取り巻く環境についての要因（以下、環境要因）であり、⑥～⑩はアスリートの志向性やそれにもとづく行動（以下、内的要因）である。環境要因①～⑤は、特に中学・高校期に観察され、⑥の要因である「競技者として専念できる環境」に相当していることが示唆された。Figure1 は、この結果から推定される要因の連関図をに示している。ここから、以下のことがわかった。「自己価値や自尊心の多くを競技状況に求める」態度（要因⑦）や、「社会生活を営むための多くの対象を犠牲にする」（要因⑧）態度は、比較的早い時期から現れているが、小学校時に自他とも

にトップアスリートに足る資質を認められるような「戦績」をあげたことがこれに大きく関わり、中学校選択をきっかけに「競技者として専念できる環境を志向」（要因⑥）し始める態度が形成されたようである。中学校入学当時から、「多大なる心理的・身体的投資」（要因⑨）をし、「競技を最優先事項としなければならない」（要因②）状況や、「競技生活を支えてくれる便宜」（要因③）に甘える態度、「ソーシャルサポートが得られにくい」（要因④）状況に陥り始めたことが窺えた。さらに、高校選択時には、「スポーツからの人間疎外・人間の用具化」（要因①）が公然と行なわれていた「目的のために合理化された環境」（要因⑤）を選択し、競技以外の対象を持つことができなくなった経過がみてとれた。

アスリートの内的要因⑥～⑩は、競技成績向上のために、または向上したために環境要因①～⑤と相互に関連しながら強化されており、競技成績がそれらを動機づけているように見える。そのため、環境要因で挙げられた状況に適応することが、彼にとって競技力向上と同義であったことが確認できた。その結果、彼は競技以外の対象をもてなくなり、ますます競技に多大なる投資を重ねている。そのことは、社会生活を営むための多くの対象を無視し、犠牲にしているという側面を持つ。さらにそのことがまた更なる投資を生み、自己の価値や自尊心を競技状況で測ってしまっている。

以上から、彼の競技人生は次のようであるといえる。スポーツに惹かれ、打ち込み、打ち込むことで様々な対象を犠牲にし、心的にも肉体的にも投資を続けた。そして結果を出し、トップアスリートたる必要条件を認められ、ますます打ち込むというサイクルを作り出した。進学先も自分の競技力を向上できる環境を志向し、そこがアスリートを駒のように扱おうと知っていたながら選んだ。もちろん、当時は自己の利害と一致していたであろうし、自分が場を追われるとは夢にも思わなかったであろう。しかし、そうであっても彼はそこから逃れることができない

かった。競技から離脱することは、今まで競技生活や自己の価値を支えてくれていたあらゆるものが失われ、また彼にとって困ったものに変容するからであった。しかも競技離脱は、決定的な対象の喪失である。競技を最優先にしてきた彼にそれに耐えうるだけのサポートも、他に移行する対象もなかった。

## (2) 探索的知見についての検討

本研究のもう一つの目的は、彼が競技の中で追求していた「トップアスリートになる」という果たされなかった要求と、現況への適応のための「現在の取り組み」に焦点を当て、事例を詳細に記述することによって新たな知見を求めらるものである。したがって探索的研究の側面を持つ。ここでは、以下の二点に分けて検討する。

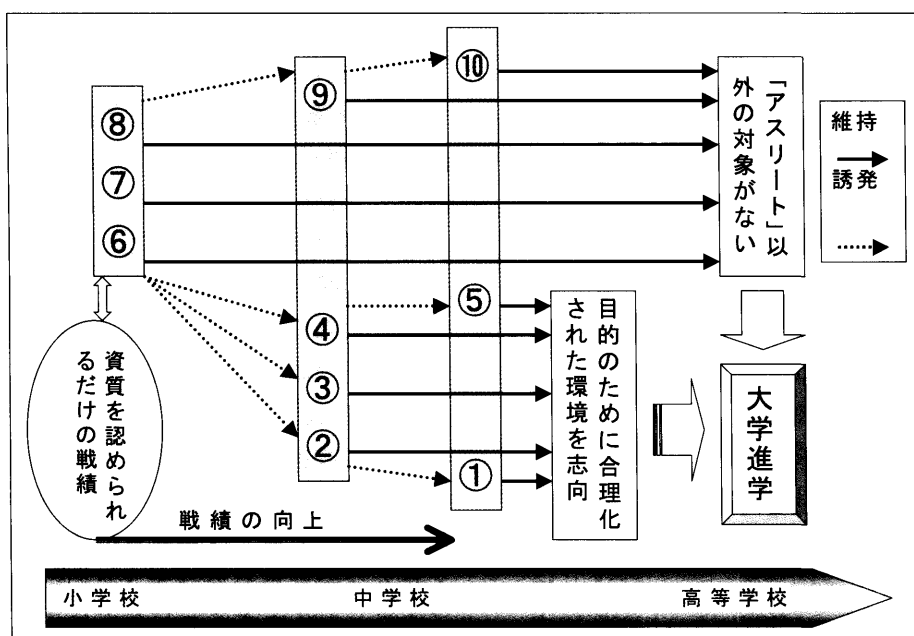


Figure1 観察された時期から見た要因の連関

### ①対象者の果たされなかった要求への態度

一般に、対象喪失に引き続き失った対象への思慕が募り、再会を願い、やがて、悲哀、絶望、怒り、対象に対する自分の未熟さへの悔やみや償いの気持ちを辿るような過程をモーニング (mourning) と呼んでいる。Table3に小此木によるモーニングワークの過程を提示した。本事例中に、対象喪失によるモーニングに酷似した反応、行動が観察された。Bowlbyによれば、モーニングの過程は通常4つの段階を辿る<sup>16)</sup>。本事例における第1段

階のような情緒的危機は、高校2年生のときの敗北のために、一切試合に出してもらえなくなり、これまで目指してきたトップになるための取り組みが事実上困難になったときに見られている。つまり、競技そのものを失っておらずとも彼の目的は絶たれており、事実上のアスリートとしての自分を喪失している。このような時一般に、近親者や友人等がパニックに陥らないように対象喪失の当事者を支えたり助けたりするのが常である。しかし、彼が所属していたのは、目的のために集



大学運動選手の不適応についての事例研究

Table 2 トップアスリートが持つ不適応要因との対応

	要因	時期	事例から観察された要因との対応
環境要因	① スポーツからの人間疎外, 人間の用化	高校2年	一度の失敗と彼の後輩の台頭によって「チーム」にとって彼は「いらぬ存在」となった メンバーからは「さされたばかりではなく、監督は「毎日のように」彼を罵倒し、痛めつけている。「監督からおまえはいらぬ奴だと言われていた」
	② 競技を最優先事項としなければならない状況	中学 高校選択時 高校入学当時	休みの日さえ、「高校に練習に行きなさい」という指示 「ばかになる」、「勉強しなくなる」と認知、その環境に入ることは文字通り、競技を最優先しなくてはならないということを予想 監督から明確な言葉で「勉強はしなくていい」と指示
	③ 競技生活を支えてくれる便宜の存在	中学 高校入学	監督の先生以外も「いい先生は、授業中『寝ていてもいいよ』といってくれた」という状況 中学校時全国大会2年連続ベスト8と安定した力を発揮した彼を、スポーツ推薦の特待生待遇で入学 第一志望でないに関わらず、特待生(授業料免除)で入学させている
	④ ソーシャルサポートが得られにくい	中学から 高校	競技中心の生活をしてきたため、「部活以外の友達が誘ってくれなくなった」とことや、それに伴い「部活の友達」としか友人関係を築くことができなかった。 監督は無口で無表情であり、監督の大学の後輩であるという二人のコーチは、監督の言うことに全てしたがっていた 地元の友人にも、「恥ずかしくて」相談することもできなかった。 両親からも、「おまえが頑張ってくれればいい。しかし途中で投げ出すようなことだけはするな」といわれた。 彼の話最後までよく聞いてくれた「唯一の理解者」であった兄は、外国に留学していた。
	⑤ 目的のために合理化された環境	高校	クラスの中でさえも、その意に反して勉強していた子は「クラスからはぶら(か)かれていた」おり、「真剣にやっていた奴は授業中みんな寝ていた」という認知が形成されている。 午前中が普通授業で午後は体育と称してクラブ活動が行われていた 入学した高校は、普通コースとは異なった、競技者のために合理的なシステムが形成されているスポーツコース
内部要因	⑥ 競技者として専念できる環境を志向	中学選択時 高校選択時 現在	「全国大会優勝という周囲からの期待」もあって、「もっと強くなれる」という思いから、それにふさわしい「練習時間も確保されていて、県内で一番強い学校」である中学を選んだ 目的のために、「環境がいい」と周囲から勧められた高校に進学している 現在の大学は、「頑張ってる」はいるものの、「ここではトップアスリートになれない」と認知しており、自分の目標との乖離に悩む一面も見せている。
	⑦ 自己価値や自尊心の多くを競技状況に求める	小学校から現在に至るまで	競技成績が周囲の期待や自分の期待ほど振るわなかったときは必ず、「だめな人間、何やってもだめな人間だ(中学)」とか、「やっぱりだめだ」など、競技成績によって自分の価値が上下する 競技成績があがると自分の有能感も高まり自信が出てくるが、競技での失敗に於ける監督の評価に対して、それが本当に正しいのかどうかを吟味することもなく、「負ける」イコール「だめな人間」という認知を持つ
	⑧ 社会生活を営むための多くの対象を無視・犠牲	小学校時 全般の認知	「遊びも勉強も犠牲にして」おり、「(周囲に)おいていかれるような気がしていた」。 また、「外(周囲)の感じがよくわからない」など、隔絶された状況 競技生活以外のことについての答えは専ら「遊びと勉強を犠牲にしていた」
	⑨ 多大なる身体的・心理的投資	中学・高校 高校 大学	彼の一日は、朝練習から始まって、夜遅くまで練習するなど長時間体育館にいる。 たまの休みもボーっとして過ごした。 昼食を食べた後はずっとトレーニングの時間として当てられ、彼らは頻りに実業団と一緒に練習していた。 一日の練習が終わると、疲れ果てて「(勉強など)やらなければと思ってもできな」かった。 漠然としてではあったが、体育の先生になりたいという目標を持っており、そのために「勉強したい」と思っていたが、できなかった 生活のほとんどは競技のことを考えている
⑩ 競技以外の対象を持たない	高校 大学	友人たちは「勉強の話はぜんぜんしない」だけでなく、競技以外の場面では「寝ていることが多い」、「普通の高校生が何をしてたのかもわからない」という状況。 たまの休みもボーっとして過ごしており、競技以外の役割が見出せない。 クラブの中にも特定の友人はできず、「趣味が合わない」「パチンコとかゲームとか面白いと思えない」	

まった個人の集団であり、腹をわって話す友人もなく、両親も遠く離れた故郷から逆に戒めるなど、彼にはこの対象喪失を支えてくれるサポートは少なかった。第2段階には、「もしかしたら何とかなるかもしれない」と監督の関心を得るためにひたすらトレーニングに励みつづけたことが該当するだろう。そして高校三年生になったとき、彼は第3段階の只中にいたと思われる。彼は「マネージャーに

なって部に貢献しようか」など、アスリートへの道を断念しようとする。しかし、彼は「もしかしたら・・・」と期待を捨てきれずにいた。結局彼は、その対象へのこだわりを捨てることが出来ないまま、大学進学を果たした。彼は二度の受験失敗の末、地方体育大学の実技試験に合格するが、新天地で改めて競技ができるという期待から、モーニングワークの完結は為されなかったようであった。

Table3 小此木によるモーニングワークの4段階

第1段階	第2段階	第3段階	第4段階
一般に数時間から一週間持続する無感覚の段階から次第に強烈な情緒反応を引き起こす。これは一種の心的ストレス反応であって情緒的危機とも呼ばれる。	まだ本当に失ったという現実を認めることができないで、相変わらず愛着が続いている段階である。失った対象を取り戻そうとしたり、保持しつづけてやろうとする段階で、もう一度取り戻せるのではないかと空しい努力を続ける。	もはや対象を喪失したという現実を認める段階であるという。この段階で断念による対象喪失が体験される。失った対象との結合によってそれまで成立していた心のあり方が解体し、激しい絶望と失意が襲う。	それまで愛着を持っていた対象から心が本当に離れ、自由になり、場合によれば別の対象に気持ちを向け変えることができるようになり、立ち直りとか再建の努力が始まる。

「対象喪失」を経験したとき、モーニングを回避する防衛の心理として小此木<sup>16)</sup>は、これを「躁的な防衛」と呼び、何事もなかったかのように日々を過ごす場合があることを指摘している。本事例は、大学進学を果たせたことによって、「トップになるため取り組み」という対象を心のどこかで失ったことに気づきつつも、失わずに済んだような気持ちになったのかもしれない。すなわち、大学進学という新しい場を迎えることによって対象喪失を先送りし、あるいはそれ以後の取り組みに影響するような何事もなかったかのように、継続して同じ目標に取り組んでいる可能性があることが示唆された。

②現在の取り組み

次に、彼の取り組みが果たせなかったにも関わらず、以前の目標を掲げていることにつ

いて討議する。

人間は、不完全なものを完全なものにしようとする欲求がある<sup>18)</sup>。ゲシュタルト療法の創始者であるPerls<sup>17)</sup>は、人間の終結を迎えなかった要求のことを「未完の経験」と呼び、「地と図」の概念を用いて説明している。

人間はまず、意識の表層にある要求(図)を満たし、その後ろにあった次の要求(地)との入れ替えを行う。しかし、「地」と「図」の自由で創造的な入れ替わりは、過去の傷により妨げられることがある<sup>18)</sup>。未完結のゲシュタルトをそのまま完結させようとする、過去に負った傷のために生ずる固定観念や不明確な「図」が成立してしまい、現在に於ける自分や他人、環境との十分な接触を阻む「固定化したゲシュタルト」となって、完結を困難なものにし、新しいゲシュタルト(取

り組み)の成立を阻むものとなる<sup>17)</sup>。そのため、このゲシュタルトを正常に完結させることが次への取り組みへの生産的な一歩となる。それは必ずしも、要求が果たされることだけではない。ネガティブな結論についてあるがまを受け入れることは、ゲシュタルトの完結を導くのである。

本事例対象者は、トップアスリートになる展望が失われたにも関わらず「トップアスリートになりたい」という要求を末だに掲げ、大学入学前同様に取り組んでいた。すなわちそれは、果たせなかった未完結のゲシュタルトの完結を求め、競技に従事していると考えることができる。そして、彼の取り組みがうまくいかない原因の一つとして、過去に負った傷や未完結の経験が正常な完結を阻害していることが考えられた。すなわち、(1)で示唆された「競技場面に自分の価値を求める」態度を持つ彼が、用具化され、トップアスリートになるに足りないと評価されて機会を失ったことが、現在の取り組みに影響を及ぼしていると考えられた。つまり、彼の未完結にされた目標は固着となって現在の営みを阻害しているのである。当時の監督に対して「あの時、自分をどう思っていてくれたのか知りたい」という言葉は、彼の末だに癒えない傷の深さを感じさせる。彼は、機会を失った時に完結させるべきであった目標を再び同じ形で自己の中心に据え、努力しようとするが、以前に得た傷による否定的な自己認知は、未完結のゲシュタルトを完結させるどころか妨害し、そのことにより傷をつくるという悪循環をつくっている。そのため、その後の取り組みが実りのあるものとはならず、不適応感を持つに至る可能性も同時に示唆されたといえよう。

以上から、本研究により大学生活不適応の要因として、以下の点が示唆された。

- 1) トップアスリートの高度化された競技環境とそこで形成される内的な要因は、トップになれたか否かという結果にかかわら

ず、その環境と一体感を持ちながら(競技成績の向上等)取り組んでいたことによって形成される。

- 2) 先行研究から抽出された全ての要因は、競技成績の向上とともに内外から誘発され、自ら志向するようになるというプロセスをたどるものであるということ。
- 3) 競技継続していたにもかかわらず、レギュラーを外されたとき、対象喪失のモニタリングワークに酷似した現象が観察されており、彼にとっての対象とは「競技そのもの」ではなく、「トップになる取り組みをしている自分」だったということ。
- 4) 対象喪失を回避したために、大学生活における目標設定が高校での未練を引きずる形になっていること。
- 5) 未練によって設定した目標は、未完の経験となって固定化したゲシュタルトとなり、より一層ゲシュタルトの完結を導かないこと。

## VI. まとめ

本研究で検討した大学生アスリートは、自他共にトップアスリートとなる可能性を認められ、トップアスリートと同じ志向性を持ち、同じ環境でトレーニングしていたために、トップアスリートではないにも関わらず、彼らが持つ内的な問題を持つにいたっていることが示された。彼の大学に来てからの取り組みが、空回りで実を結ばないことの原因の一つには、トップアスリートの展望が失われているにもかかわらず、そのまま目標の再設定することなく競技に取り組んでいたことが考えられた。アスリートにとって、精神的にも肉体的にも能力的にも自分がトップを目指せないと認めることは、競技そのものを失わなくても対象喪失となり得る。それは、彼らのそれまでの取り組みを考えれば容易に承認できることではないことは想像に難くない。彼にとって大学進学は、それを躁的(防衛)に回避することとなった。しかし、そのこ

とが適切な目標設定を阻害し、現在の取り組みをも阻害していると考えることができた。

繰り返すが、彼のように高い目標を持って取り組んできたアスリートにとっての「対象」とは、競技そのものだけでなく「トップになる」という目標であった。このことにより、従来競技活動から離脱すること(引退を含む)が対象喪失として考えられてきたが、必ずしもそれだけでないことが示唆された。

以上から、彼らがその競技生活ゆえに経験され、形成されてきた要因を保有・潜伏させ、さらに大学での目標設定が未完の経験の完結を目指したものである時、大学生活で経験され得る様々なストレスは、彼に決定的な不適応感を抱かせるという可能性が示唆された。

## Ⅶ. 課題

本調査では、従来の心理学研究の方法である要因の抽出や要因間の関連だけではなく、個人の間人理解に主眼を置いたため、トップアスリートになれなかったアスリートの競技史を取り上げ検討した。しかし、本研究は一応の仮説はあったものの探索的な試みであり、今回は一事例を報告するのみに留まったことから、ここで得た知見を一般化するためには、今後、多くの事例の検討が必要である。また、トップになれなかったアスリートの中にも、現在の取り組みに非常に生産性が見られ、新たな目標を設定しなおしている者もいるはずである。そのような事例を抽出し、検討を加え、比較することによって本研究も意義深いものとなると思われる。

## 参考・引用文献

- 1) Chartrand, J.M and Lent, R.W. 1987 Sports Counseling: Enhancing the Development of the Student-Athlete. Journal of counseling and development, 66: 164-167.
- 2) Danish, S, R, Petitpas, A, Hale, B. 1993 Life Development Intervention for Athlete: Life Skills Through Sports. The counseling Psychologist, July: 352-385.
- 3) 早川武彦 1986 現代スポーツの国際比較, 体育原理専門分科会編, 体育原理2 スポーツの概念, 不昧堂.
- 4) 深沢宏 1981 一流陸上競技者への社会化に関する日・加比較研究, 一流競技者の社会学, 体育社会学研究会.
- 5) 川辺光 1981 日本社会の価値体系と日本人のスポーツ観の構造, 一流競技者の社会学, 体育社会学研究会.
- 6) 菊地直子・丸山富雄 1997 体育大学における退学者の特徴に関する予備的研究. 仙台大学紀要, 28-2, 135-144.
- 7) 菊地直子 2001 アスリートの大学不適応の諸要因についての事例研究. 第52回日本体育学会発表抄録
- 8) 岸順治・高見和至・中込四郎 1988 運動選手の自我同一性における“運動選手としての同一性感”の役割. スポーツ心理学研究 14-1: 36-41.
- 9) 宗方保 1986 スポーツの内部構造. 体育原理専門分科会編, 体育原理2 スポーツの概念. 不昧堂.
- 10) 中込四郎 2000 スポーツの競技引退に関する心理社会的研究. 平成9~11年度文部省科学研究費報告書(基盤研究C-(2) 課題番号0960084).
- 11) 中込四郎 1999 「臨床スポーツ心理学」の方法. スポーツ心理学研究 25-1: 30-39.
- 12) 中村敏雄 1995 日本のスポーツ環境批判. 大修館書店.
- 13) 大場ゆかり 1999 競技引退の生起条件に関する考察. 日本スポーツ心理学会第26回大会発表.
- 14) 岡浩一郎・竹中晃二・松尾直子・堤俊彦 1998 大学生アスリートの日常・競技ストレス尺度の開発およびストレス評価とメンタルヘルスの関係. 体育学研究, 43, 245-259.
- 15) 丹羽 昭 1986 スポーツの本質. 体育原理専門分科会編, 体育原理2 スポーツの概念. 不昧堂.
- 16) 小此木啓吾 1991 対象喪失と悲哀の仕事. 精神分析研究, 34-5: 294-322.
- 17) Perls S.F, (1973) "The Gestalt Approach & Eye Witness to Therapy"
- 18) 倉戸ヨシヤ監訳 1990 ゲシュタルト療法-その理論と実際-. ナカニシヤ出版
- 19) ペトリューシカ・クラークソン著, 日保田裕子

- 訳 1999 ゲシュタルト・カウンセリング, 川島書店
- 20) Petitpas, A, Danish, S, R Mckelvain, and Murphy. S. 1992 A Career Assistance Program for Elite Athlete. *Journal of counseling and development*, 70: 383-386.
  - 21) 鈴木壮・中込四郎 1988 スポーツ経験による人格変容に関する研究展望. 岐阜大学教育研究報告(自然科学)12: 59-72.
  - 22) 鈴木守、糸野豊、古屋正俊 1981 一流選手の育つ条件とその意識. 一流競技者の社会学, 体育社会学研究会.
  - 23) 豊田 則成・中込 四郎 1996 運動選手の競技引退に関する研究: 自我同一性の再体制化をめぐる. *体育学研究* 41: 192 - 206.
  - 24) 上野 耕平・中込 四郎 1998 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. *体育学研究* 43: 33 - 42.
  - 25) 上杉正幸 1984 スポーツの高度化の現状と問題, 現代スポーツの社会学, 不昧堂.
  - 26) 山本孟 1986 19世紀のイギリスにおけるスポーツ概念-パブリック・スクール・スポーツの起源とその本質-. 体育原理専門分科会編, 体育原理2 スポーツの概念, 不昧堂.
  - 27) 山本清洋 1984 スポーツによる社会化の可能性と限界. 現代スポーツの社会学, 不昧堂.
  - 28) 山中康裕 2001 事例検討と事例研究. *臨床心理学* 1-1: 17-20.
  - 29) Westhner .P and Orlick .T 1986 Retirement Experiences of Successful Olympic Athletes. *International Journal of Sport Psychology.*, 17:337-363.